

1_01. 計画コンセプト 1

はじめに

八幡市旧本庁舎は、昭和 53 年から行政の中心としての役割を果たしてきましたが、経年劣化に伴う老朽化や耐震性能の不足が指摘されていました。この問題を解決するため新たに建設された新本庁舎は、市民に親しまれる開かれた庁舎を目指して、令和5年1月に開庁を迎えました。

一方、旧本庁舎が立地する場所は、庁舎敷地全体において最も立地条件の良い場所であることから、旧本庁舎を解体し、その跡地には新本庁舎の防災拠点機能を強化するための「防災ひろば」を整備するとともに、かつて行政の中心であったこの場所が、新たなシビック交流拠点である「市民ひろば」として生まれ変わるための整備を行います。市民の交流・活動を育むために、庁舎敷地全体で、日常的に人々が集まり滞在できる場＝『やわたテラス』の構築を進めていますが、新本庁舎内の『市民プラザ』や八幡市文化センターと一体となり構成される『やわたテラス』に、『防災・市民広場』が加わることで、これからの八幡市のまちづくりの基盤が強化されることになります。

基本理念と施設整備方針

令和 6 年 10 月に策定された『八幡市防災・市民広場整備基本構想』中で、広場整備の基本理念と、基本理念を実現するための施設整備方針が掲げられています。本整備では地域の安全・安心を支える防災拠点となるとともに、市民が自由に集い、コミュニティ活動を育むシビック交流拠点となる『防災・市民広場』を整備します。

広場整備の基本理念

市民に親しまれる『やわたテラス』



基本理念を実現するための施設整備方針

地域防災拠点となる『防災ひろば』

シビック交流拠点となる『市民ひろば』

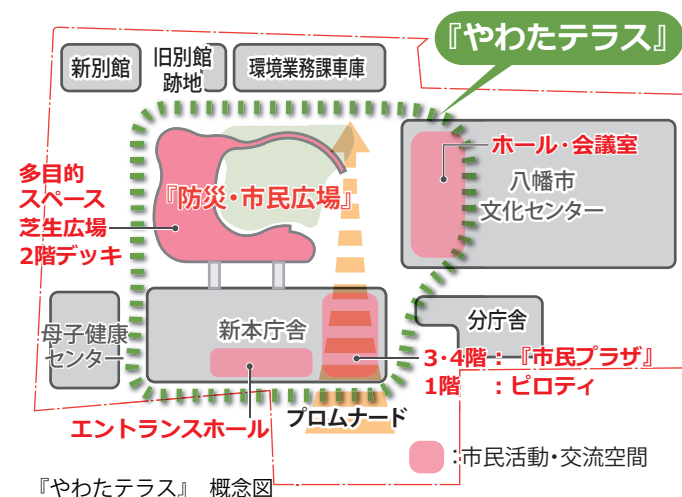
庁舎敷地の場所性

建設敷地（旧本庁舎跡地）は、市の北部にある石清水八幡宮駅周辺を生活拠点とする八幡地域に位置しています。八幡地域は古くから石清水八幡宮を中心に発展し、交通の要衝として門前町の賑わいを見せてきました。現在は、八幡市文化センターや母子健康センター・休日応急診療所、八幡市民図書館などの公共施設が集積しており、八幡市都市計画マスタープラン（平成 31 年）では、シビック交流拠点と位置づけられています。



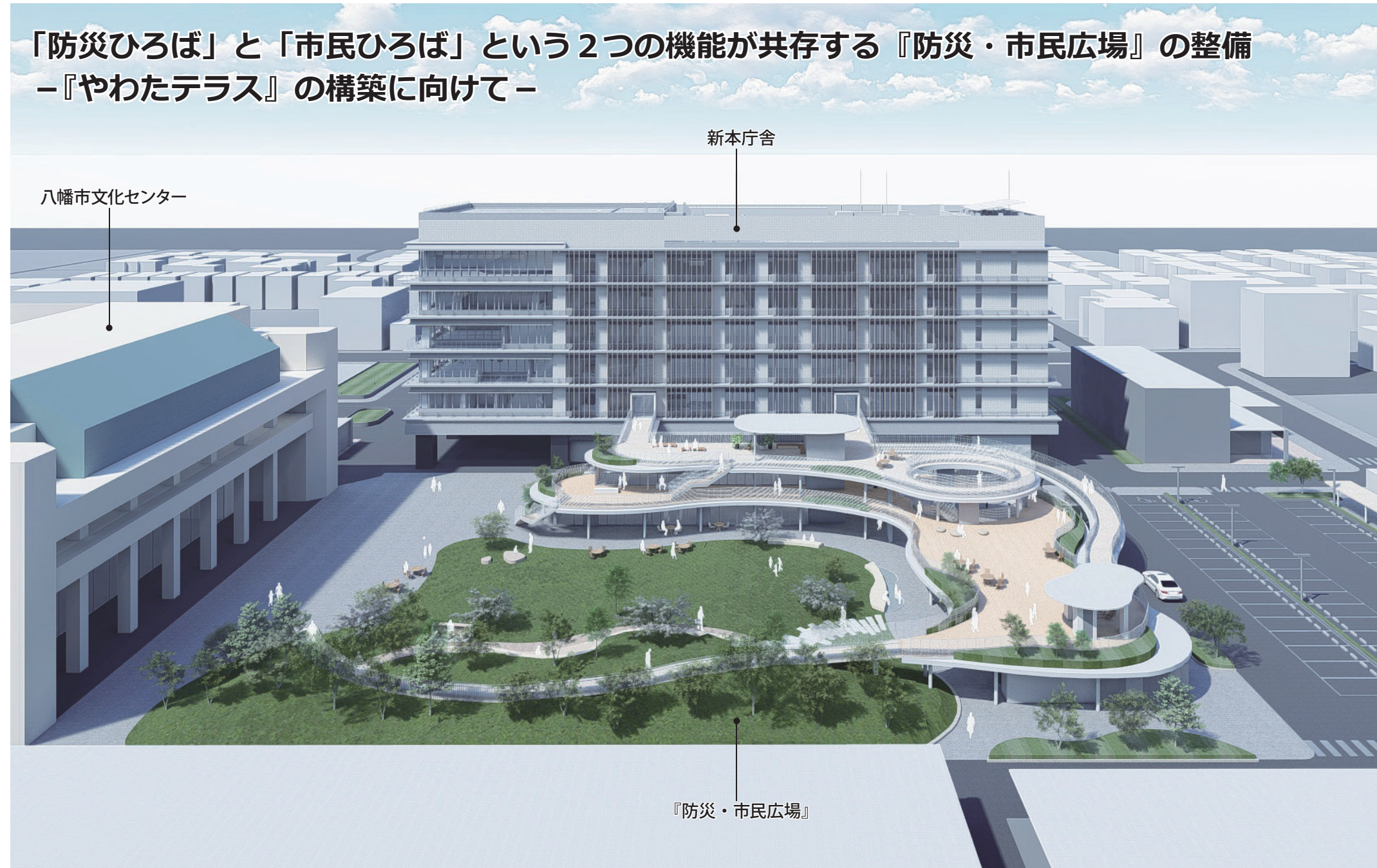
『やわたテラス』を核とした全体計画

市民が日常的に集まり活動できる場として、八幡市文化センターや新本庁舎市民プラザが『やわたテラス』として整備されてきました。今回『防災・市民広場』を『やわたテラス』の一部として整備することで、より多様な居場所が生まれ行政と市民が協働する活動の舞台になります。『やわたテラス』で生まれる新たな交流と協力のネットワークが八幡市の持続的な発展を支える力となり、未来のまちづくりの起点として機能することを目指します。



2つの機能が共存する広場

ひとつの空間で「防災ひろば」と「市民ひろば」という2つの機能が共存し、日常と非日常の両方に対応できる多機能な広場を計画します。特に、日常的に市民が利用できる環境づくりが重要であるという考えのもと、慣れ親しんだ場所が非日常時にはイベントの場や防災拠点にモードチェンジすることで、いつでも市民に親しまれる『やわたテラス』を実現します。



1_01. 計画コンセプト 2

プレイス・メイキング

今回の広場整備における理念は、地域の安心・安全を支えるとともに、地域に根付くシビックプライド（愛着と誇り）を育み、これからのまちづくりの起点となる空間を創造することにあります。

八幡市は、長い歴史と豊かな文化を背景に、市民が地域に対して強い愛着と誇りを抱いてきました。しかし、現代においては、自然災害の増加や少子高齢化など、地域社会が直面する課題が多様化しており、これまで以上に地域の絆と活力を強化することが求められています。

これからのまちづくりの起点となる、「居心地が良く、使われる公共空間」を創出するためには、人々の活動の舞台が必要であると考え、アクティビティ・ファーストのデザインとしてプレイス・メイキングの考え方を導入して広場づくりを行います。

アクティビティの種類

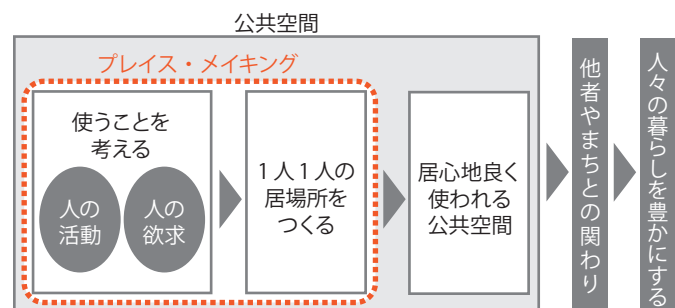
プレイス・メイキングの初めのステップは、公共空間における人の活動＝アクティビティを考えることにあります。様々なアクティビティを想像し、それらが起こる居場所・舞台として空間を構成します。

屋外のアクティビティは、必要活動・任意活動・社会活動という大きく3つのタイプに分けることができます。

『防災・市民広場』では、そのうち任意活動・社会活動の2つが主に展開されると考え、任意活動・社会活動のアクティビティを想定しプレイス・メイキングを行います。さらに市民ワークショップを3回実施し、そこで挙げられた数多くの市民のニーズを加味することで、より多様なアクティビティについて考えました。

モードチェンジする『防災・市民広場』

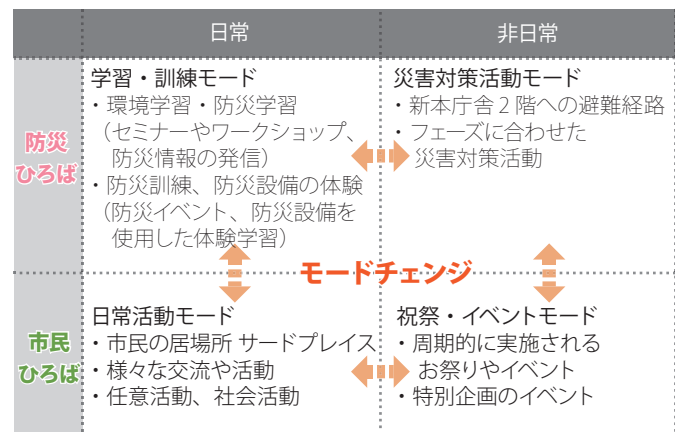
『防災・市民広場』は、災害時には地域の安心・安全を支える拠点＝「防災ひろば」として機能するだけでなく、シビック交流拠点として、市民が日常的に集まり互いに交流を深めると同時に、地域の伝統や文化を継承し、シビックプライドを育む場＝「市民ひろば」としても機能します。また、「防災ひろば」と「市民ひろば」はそれぞれ日常・非日常の両方に対応します。普段使いしている日常の居場所が、非日常の活動の拠点・舞台にモードチェンジします。一つの空間で、「防災ひろば」と「市民ひろば」、「日常モード」と「非日常モード」を掛け合わせた4つのモードに転換できる多機能を備えた広場とします。



プレイス・メイキングの考え方
出典：UR 都市機構まちの空間形成・イノベーションワーキングチーム
「居心地が良く、使われる公共空間をつくるために
ープレイスメイキングから考えるまちづくりVer.2.0」

必要活動	任意活動	社会活動
ほとんどすべての条件のもとで一年中行われる	具合の良い外部条件があるときだけ発生する	人びとが動き回り同じ場所にいることの直接の結果として自然に生まれる
- 学校に行く - 仕事に行く - 買い物をする - バスや人を待つ - 配達をする	- 散歩する - 日光浴をする - 街を見る - 腰掛ける	- 子どもたちの遊び - あいさつと会話 - コミュニティ活動 - 人を眺める - 会話に耳を傾ける

(ヤン・ゲール 北原理雄訳「建物のあいだのアクティビティ」鹿島出版会 p284)



モードチェンジの考え方

各モードにおけるアクティビティの抽出

現在の『やわたテラス』の利用状況を踏まえると、各モードにおいて次のようなアクティビティが想定されます。また、令和7年度に3回に渡り市民ワークショップを実施し、『防災・市民広場』でやりたいコトや、提供できるコト・協力できるコトについて意見を聞き、市民の皆さんから数多くのアクティビティのアイデアを出してもらいました。ワークショップでのアイデアも含めて、想定されるアクティビティを4種類に分類します。

- ：既にあるアクティビティ
- ：空間の整備により生まれるアクティビティ

【学習・訓練モード】

- 防災セミナーをする
- 防災ワークショップ（防災デイキャンプ、火起こし体験等）をする
- 防災訓練をする
- 防災設備（マンホールトイレ、かまどベンチ等）の体験学習をする
- 防災情報の発信や浸水想定高さの表示を見る
- 防災食の試食会をする
- 環境学習をする
- バリアフリー学習（車椅子体験、手話セミナー等）をする



日本赤十字社 HP より



株式会社 DEKIRUWORKS HP より

【日常活動モード】

- 創作ワークショップやDIYの体験教室に参加する
- 作品を展示する
- 木陰で読書、マイクロライブラリーで絵本を読み聞かせる
- ヤワタカラや地元野菜を販売する
- チャレンジショップを出店する
- 放課後に学習する、シェアオフィスで異業種交流をする
- シェアキッチンで料理教室やこども食堂を開く
- カフェでお茶をする
- お花見やお月見をする
- 散歩やラジオ体操、ヨガや太極拳をする
- 日光浴や昼寝をする
- かくれんぼやボール遊びをする
- コミュニティガーデンでの栽培や芝刈りボランティア活動をする
- 八幡の伝統について学ぶ（お茶会等）
- 星空観察会や屋外での映画鑑賞会をする
- 大人や高齢者も楽しめるスポーツ教室をする
- バーベキューやビアガーデンをする
- 子育て相談会をする
- デジタルツール相談会をする

- ：運営プログラムや中間支援により生まれるアクティビティ
- ：季節により生まれるアクティビティ

【災害対策活動モード】

- 災害対策車両（トイレカー等）を利用する
- 物資の搬出入や荷捌きを行う
- 物資を保管する
- ボランティアを受け入れる
- 災害対策用仮設テントを設置する
- 災害ごみを一時保管する



株式会社ニットク HP より



とかち広報消防事務組合 HP より

【祝祭・イベントモード】

- ハチフェスや市民文化祭をする
- 盆踊りや七夕祭をする
- 太鼓まつりの足慣らしをする
- 地元野菜のマルシェをする
- フリーマーケットやハンドメイドマーケットをする
- フードイベントやキッチンカーイベントをする
- お酒イベントをする
- クリスマス会やハロウィンイベントをする
- 餅つきイベントや節分イベントをする
- バンドや吹奏楽、コーラスの音楽イベント、カラオケ大会をする
- スポーツイベントやダンスイベントをする
- アートイベントや演劇イベントをする
- 古本市をする
- 移動式ウォーターパークをする
- 移動動物園、昆虫採集会をする
- 竹材を使ったイルミネーションをする

1_01. 計画コンセプト 3

アクティビティを生み出す居場所の要素

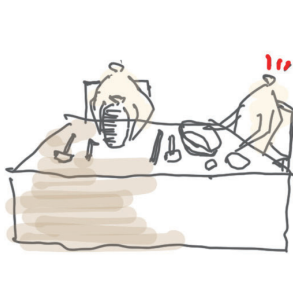
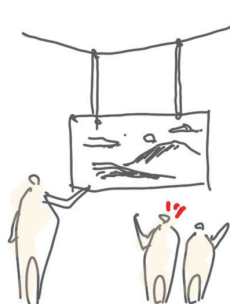
アクティビティ・ファーストの考え方により、具体的なアクティビティから空間を構成し、居場所をつくります。1人1人が自分の居場所だと感じられる空間は、心地良く感じられ、行きたくなる場所へと育っていきます。そのような居場所では、多世代の多様な人々の交流が生まれ、新たなコミュニティ形成の場となります。

・木陰で寝そべる

・創作する

・作品を展示する

・教える、学ぶ

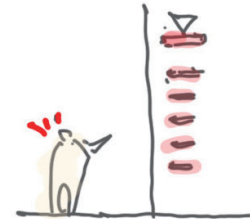
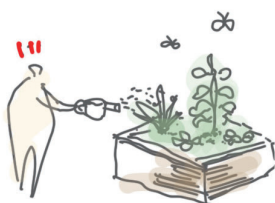


・育てる

・災害を意識する

・自然を感じながら歩く

・調理する、飲食する



環境や人数規模に応じたアクティビティ

『防災・市民広場』には屋内外を問わず様々な規模の場を設けることによって、空間の環境や性質、また活動の人数規模等に応じて、多様なアクティビティの展開が可能な広場とします。環境や人数規模によって想定されるアクティビティの空間イメージを右表に例示します。

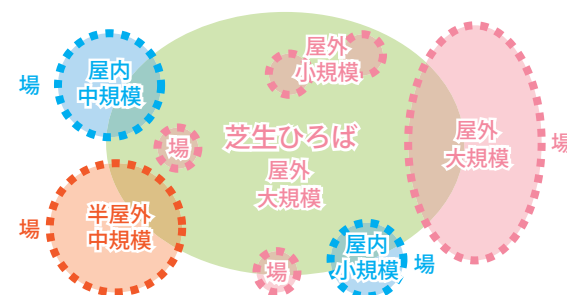
1人で静かに過ごす時も、大人数で賑やかに過ごす時も市民の活動の舞台となることで、あらゆる状況に応じて1人1人の居場所になる空間を目指します。

また、芝生ひろばを中心として環境・規模の異なる様々な場を構成します。

異なる空間を求めて集まった人々の活動が、芝生ひろばという大きなオープンスペースを介して、互いに関わり合い発展していく広場とします。

	静か・少人数	賑やか・大人数
屋外	・本を読む、読み聞かせる ・散歩する ・景色を眺める	・お祭りをする ・遊ぶ、運動する ・音楽や演劇を楽しむ
半屋外	・創作する ・展示する	・調理する、飲食する ・販売する
屋内	・学習する ・仕事をする	・ワークショップをする ・セミナーをする

様々な環境・人数規模で行われるアクティビティの例



芝生ひろばを中心とした場の構成のイメージ

アクティビティから構成した具体的な空間のイメージ

・木陰のベンチで1人で落ち着いて読書をする



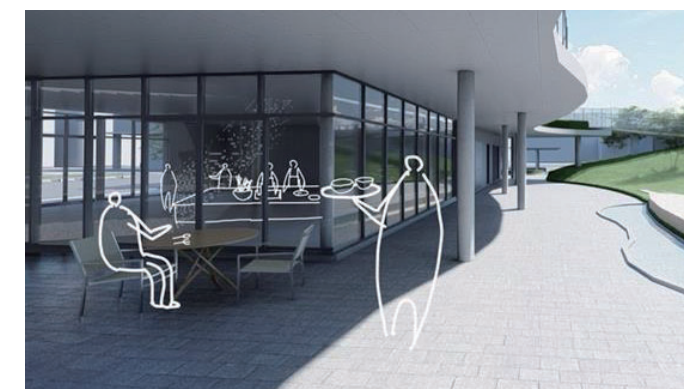
・スロープで2～3人で散歩をする



・多目的スペース2で3～4人で勉強をする



・多目的スペース1で7～8人で料理を作って食べる



・2階デッキで子どもが10～15人で遊び、大人が見守る



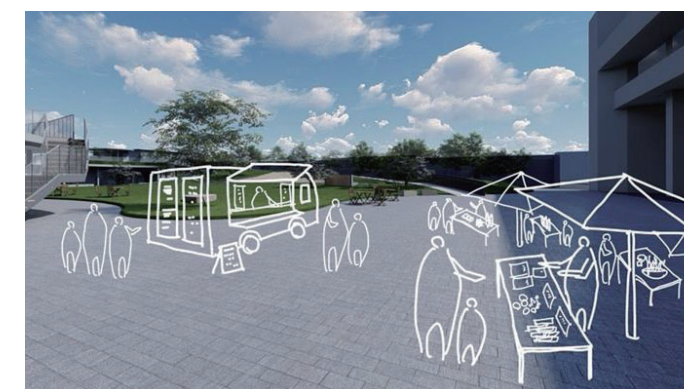
・大屋根ひろばで20～30人で創作・展示をする



・芝生ひろばに腰掛けて50人で音楽や演劇を楽しむ



・市民ひろばで100人でマルシェを楽しむ



1_01. 計画コンセプト 4

市民ひろばとしての考え方

環境問題、少子高齢化、社会格差の拡大など、市民の交流や協働が求められる課題が山積しています。これからの市庁舎は、目的をもって訪れる役所から、市民が自由に集い、コミュニティ活動を育むパブリックな場所へと姿を変えていく必要があります。

新本庁舎市民プラザや八幡市文化センターに、新たに『防災・市民広場』を加えて、庁舎敷地全体に広がる『やわたテラス』として構築し、市民の憩いと活動の場とします。多様な市民が集い、それぞれに自分らしい時間を過ごすとともに新たな出会いを促進することで、人と人との結び付きを楽しむことができる魅力的な場所を創出します。これを継承していくことで、『やわたテラス』が八幡市を象徴する新たなシビック交流拠点となります。

『ちょっとだけチャレンジ』ができるひろば

市民が日頃興味を持ち、何気なく習慣化しているアクティビティを、少し広い世界に飛び出して発信・実践するための、小さなチャレンジができる空間を設けます。

心理学者 レフ・ヴィゴツキーは、子どもが1人ではまだできないが、適切なサポートがあればできるようになる範囲を『発達の最近接領域』と呼んでいます。この小さなチャレンジとは、既に1人でできていることと、まだ難しすぎてできないことの間にある『挑戦のゾーン』に呼応するもので、学びや成長の鍵を握ります。

また、『ちょっとだけチャレンジ』を促すには、プログラムの運営や中間支援を工夫することも大切です。市民ワークショップ等を通して、運営・支援体制について考えます。

流れと澁みによる空間構成

『防災・市民広場』の空間は、全体にわたって、様々なアクティビティが展開でき、多様な人々の居場所となる『澁み』を設け、それらを繋ぐ人々の動きを『流れ』として生み出すように構成されています。

そうすることで、一つの『澁み』における小さなチャレンジが他の『澁み』における誰かのチャレンジと重なり、様々な方向に広がっていく『流れ』がネットワークを形成し、思いがけない出会いやコラボレーションが生まれる『合流地点』が形成されます。

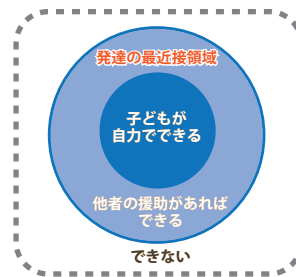
経路の選択性・回遊性

『防災・市民広場』全体に、訪れた人が選択できる複数の経路を設けます。天候や季節等の環境条件や、周辺で展開されている活動の種類によって、近道をしたり、回り道をしたりする経路の選択性を持たせています。

仙田満による『遊環構造』の考え方のように、自ら選択でき変化に富んだ空間を設けることで、1人1人が居場所を見つけられる広場とします。



『ちょっとだけチャレンジ』の考え方



発達の最近接領域 概念図

参考文献：ヴィゴツキー「発達の最近接領域」の理論—教授・学習過程における子どもの発達—、三学出版、2003 年

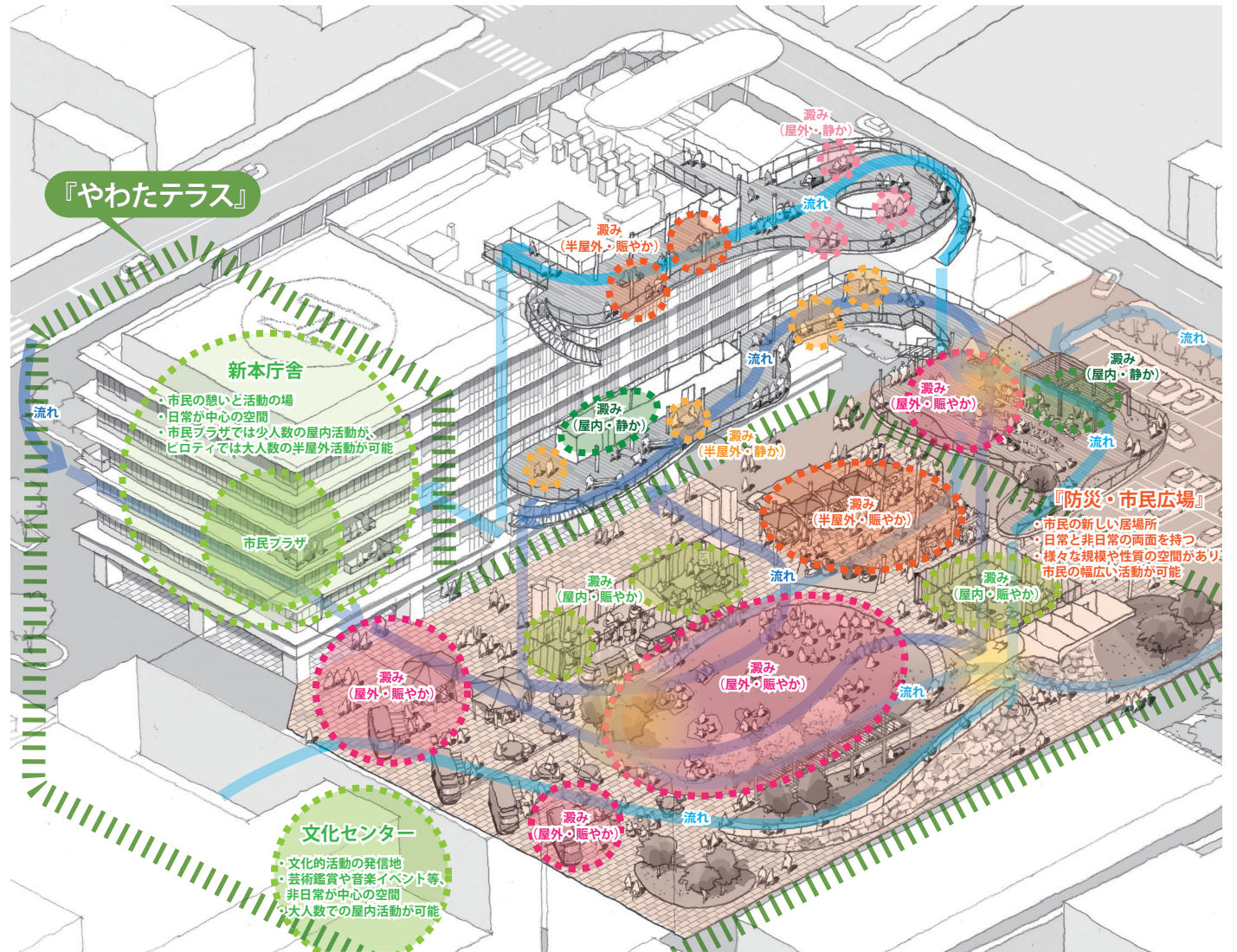


『流れ』と『澁み』の概念図

- ① 循環機能があること
- ② その循環（道）が安全で変化に富んでいること
- ③ その中にシンボル性の高い空間、場があること
- ④ その循環に“めまい”を体験できる部分があること
- ⑤ 近道（ショートカット）ができること
- ⑥ 循環に広場が取り付いていること
- ⑦ 全体がポーラス（多孔質）な空間で構成されていること

『遊環構造』の7つの条件

参考文献：仙田満：遊環構造デザイン—円い空間が未来を拓く—、左右社、2020 年



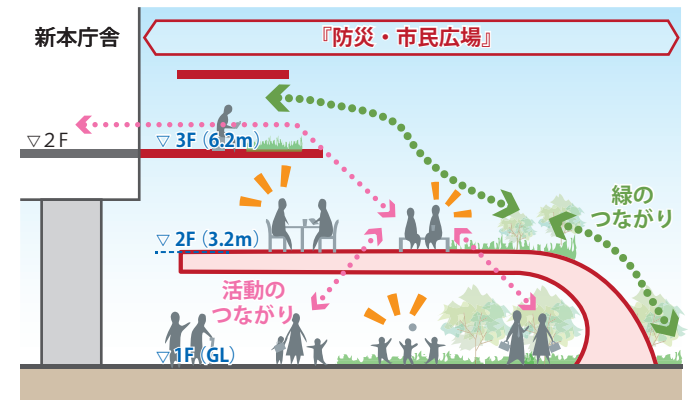
市民ひろばとしての『やわたテラス』

建築とランドスケープが融合する立体的な広場

建築とランドスケープを切り分けるのではなく、大地としての地面から建築の3階レベルに至るまで、緑の環境とアクティビティの場が連続するように設計しています。『防災・市民広場』の空間を建築とランドスケープが融合する立体的な構成とすることで、新本庁舎や文化センターとの関わりを密接にし、多様な活動のつながりが『やわたテラス』全体へ広がるように計画します。1～3階に至る様々な高さにアクティビティの場を設けることで、互いに『見る・見られる』の関係が生まれ、様々な活動が関わり合う魅力的な広場を実現します。

地理学者ジェイ・アップルトンは、人間は周囲を展望しつつ身を隠すことができる、守られた安全な場所を本能的に好むことを指摘した『眺望・隠れ場理論』を提唱しています。例えば、広場の様子を眺められる軒下のスペースなど、安心できる居場所となるような空間を設けます。

参考文献：ジェイ・アップルトン：風景の経験—景観の美について—、法政大学出版局、2005 年



建築とランドスケープの考え方

1_01. 計画コンセプト 5

防災ひろばとしての考え方

八幡市庁舎敷地は、木津川・宇治川・桂川の合流地点に位置するため、南海トラフ地震や直下型地震のほか、河川の氾濫や浸水災害に対して、ハードとソフトの両面での確実な対応が求められます。

また、災害対策を特別なものではなく、日常の一部として捉え、平時と災害時の両方に対応できるシームレスな広場として『防災・市民広場』を整備することで、地域防災力の向上を図り、安心・安全なまちづくりを強力に推進していきます。

また、『防災・市民広場』は避難所ではありませんが、災害時に広場へ避難してこられた方は一時的に受け入れたうえで、地域防災計画に定める避難所へ適切に案内する役割も担います。

災害の想定

地震による被害想定

南海トラフ地震
・想定震度 6 弱～ 6 強に該当
・危険度「中」だが危険度「高い」に近接

有馬・高槻断層
の地震
・想定震度 6 強に該当
・危険度は「高」に該当

対応
・耐震安全性は「Ⅰ類」とする

水害による被害想定

木津川浸水想定
・平成 29 年 6 月国土交通省発による木津川洪水浸水想定では三河川合流により約 6.0m の浸水深さ

対応
・2F を GL+6.2m の高さに設定し、新本庁舎 2 階まで避難できる経路を確保

大谷川浸水想定
・0.5m～ 1.0m の浸水

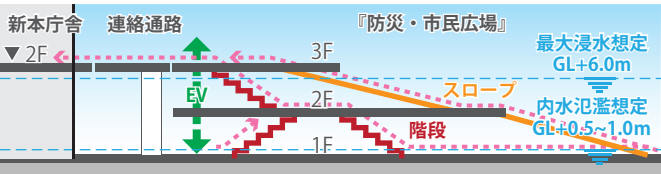
対応
・止水扉や、出入り口に止水板（手動式）を設置

防災・災害対策活動の明快な役割分担

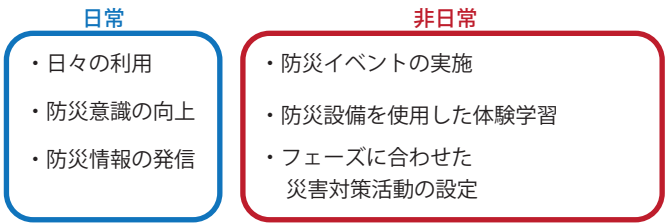
災害時には司令塔となる新本庁舎を軸に、『防災・市民広場』や文化センター、はるかぜ公園を含め、各施設が相互に連携して対応することが重要です。災害時の活動内容をゾーニングして役割を明確にしておくことで、災害規模や状況に応じて迅速に連携し、的確に機能する災害対策活動拠点となります。

日常と災害時の利便性を高める複数動線の確保

河川決壊による水害発生時は高台への避難が前提です。万が一逃げ遅れた場合は、新本庁舎 2 階へ避難することを想定し、階段、スロープ、エレベータなど、複数の動線を確保します。日常的に利用する動線を複数確保しておくことが、避難時に効果を発揮します。

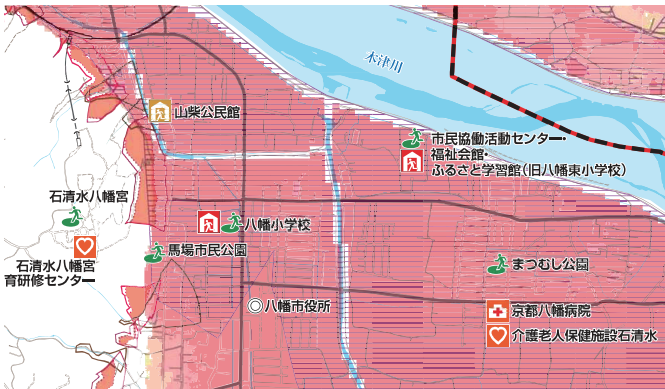


複数の動線確保



フェーズフリーによるモードチェンジ

フェーズフリーによるモードチェンジの考え方



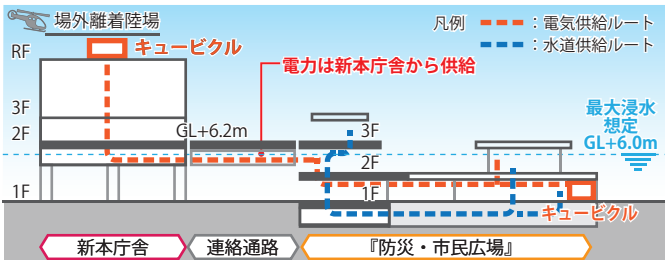
木津川浸水想定区域図



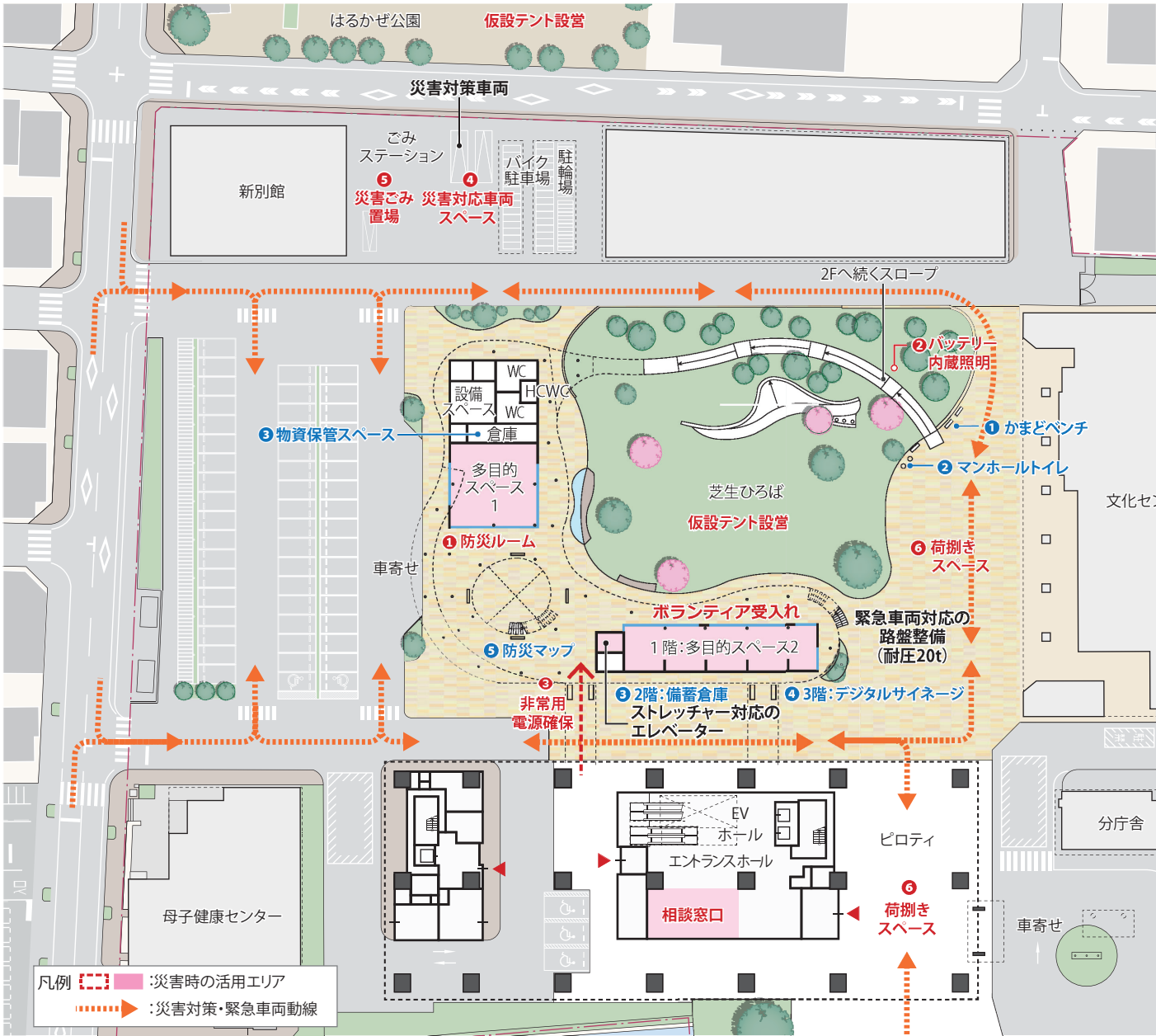
災害時の活動ゾーニング

新本庁舎からの供給設備を有効活用

新本庁舎とつながる 2 つの連絡通路を供給ルートとして日常と災害時における電源をまかなう計画とします。



新本庁舎との連携



防災設備の配置と車両動線計画

日常	
① かまどベンチ	防災設備をまとめて配置します。防災イベントや防災体験を通して防災意識の向上を図ります。(かまどベンチは日常も利用)
② マンホールトイレ	防災設備をまとめて配置します。防災イベントや防災体験を通して防災意識の向上を図ります。
③ 備蓄倉庫 物資保管スペース	2階レベルに備蓄倉庫のほか日常的に利用する道具庫を1,2階に設けます。
④ デジタルサイネージ	天候や防災情報のほか、市域内での様々なイベントや活動などを紹介します。
⑤ 防災マップ	やわたテラスの防災マップを作成し掲示します。
⑥ サインへの反映	防災設備や動線上に防災機能を意識したわかりやすいピクトを設置し、認知力を高めます。

非日常	
① 防災ルーム	多目的スペース 1 および大屋根エリアには天井にフックを設け、カーテンなどで一時的なプライベート空間を形成することが可能です。
② バッテリー 内蔵型照明	停電時における太陽光発電システムを利用した照明灯を設置します。
③ 非常用電源確保	新本庁舎 2 階から連絡通路を利用して供給します。また、広場の適所に屋外コンセントを設け利用できる計画とします。
④ 災害対策車両 スペース	別館跡地に災害対策車両 2 台分の待機スペースを確保します。
⑤ 災害ごみ置場	別館跡地にごみ置場を確保します。
⑥ 荷捌きスペース	新本庁舎のピロティと繋がる市民広場を残し、自衛隊等の大型車両によって運ばれてくる支援物資の荷捌きスペースとします。